

## 「イエシュアとは誰か」

ルカの福音書 9:18~27

### 1. 祈り

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:18 さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」

9:19 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」

今日採り上げるこの出来事は、イエシュアが「祈っておられた」という冒頭から始まっています。一体何を祈っておられたのでしょうか。その内容は記されていませんが、そもそも祈りとは何でしょう。祈りは私たちの信仰生活に欠かせないものですが、皆さんは祈りの本来の意味とその目的をご存じでしょうか。ヘブル語で祈ることをパーラル(פָּרַל)といいます。この言葉が聖書で最初に使われたのは以下の箇所です。

創世記【新改訳 2017】

20:3 その夜、神が夢の中でアビメレクのところに来て、こう仰せられた。「見よ。あなたは、自分が召し入れた女のために死ぬことになる。あの女は夫のある身だ。」

20:7 今、あの人（アブラハム）の妻をあの人に返しなさい。あ的人是預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

ゲラルの王アビメレクは、自国にやって来たアブラハムの妻サラを見初め、その美しさゆえに彼女を召し入れました。それはアブラハムがサラを妻ではなく妹だと言ったためでした。しかし神はアビメレクに現れて真実を告げられ、上記のように語られた中に聖書で最初のパーラルが使われています。「あ的人是預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。」とあるように、祈りとは本来「預言者」の祈りを指し、そしてその祈りによって「いのちを得」させること、この時のアビメレクのように「死ぬことになる」死に定められた者が、それを免れて生きること、いのちを得ることを目的とした、極めて重大な行為なのです。イエシュアの祈りがそのような祈りであったことは、言うまでもない、まさに書き記すまでもないことなのです。

そしてパーラルとは本来、預言者の祈りを指し、預言者とはこれから後に、世の終わりの日に神が成し遂げられるそのご計画を指し示す存在です。ちなみにこの「預言者」を意味するナーヴィー(נָבִיא)の最初の言及もまた上記の箇所となります。ですから祈りによってもたらされるいのちとは、今のやがて尽きるいのちのことではなく、後の世のいのちのことであり、それはすなわち永遠のいのちのことです。ここ

でイエシュアが一人祈っておられたというその内容は、その本来の意味から、この永遠のいのちについての預言者としての祈りであったのです。ですから次に群衆がイエシュアをバプテスマのヨハネ、エリヤ、昔の預言者の一人、すなわちイエシュアはナーヴィー、預言者であると言っているという記述が盛り込まれているのです。群衆のこの声をイエシュアは否定してはおりませんが、正確にはイエシュアはヨハネやエリヤのような預言者の一人なのではなく、すべての預言者たちがその預言的言動で指し示した存在、まさに預言の成就、それがイエシュアだということです。なぜなら終わりの日に起こる神のご計画はただイエシュア、この御方の御業によってのみ成し遂げられるからです。

## 2. 神のキリスト

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:20 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「神のキリストです。」

ヘブル語の視点で上記の箇所を読み解くならば、ここに登場する「キリスト」はメシア(マシーアツハ)(מָשִׁיחַ)と訳さなければなりません。この言葉はマーシャハ(מָשַׁח)が語源となっており、その最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

31:11 すると、神の使いが夢の中で私に『ヤコブよ』と言われた。私は『はい』と答えた。

31:13 わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。』

たしかにかつてヤコブはベテルで石の柱に「ヤーツァク (צֶמֶן) 油を注ぎ」しました(創世記 28:18)。そして「生まれた国」を離れました。しかし後に神は彼のその行為を同じく「油を注ぐ」という意味ですがこれをこのメシアの語源マーシャハ(מָשַׁח)と言い換えられ、「この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい」と言われました。そしてこの後ヤコブはその名をイスラエルと呼ばれるようになります。この御言葉は預言であり、やがてアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民が、新しく変えられて自分たちの「生まれた国」である地に帰ることを指し示したものです。しかし今日、イスラエルに続々と帰って来ているユダヤ人たちのことを指し示しているのではありません。なぜなら彼らはまだ変えられてはいないからです。その変えられることとは何でしょう。それはまさにこの預言が示すように、マーシャハを語源とする「油注がれた者」マシーアツハが誰かという真実に目が開かれ、イエシュアを「神のキリスト」すなわち「神のメシア」と呼ぶ者へと変えられることです。メシア、マシーアツハという名にはそのような、イスラエルの民に対する神のご計画、すなわちイスラエルの民がその離散している地から、イエシュアによって呼び集められ、「あなたの生まれた国」かつてはカナンと呼ばれた地、首都エルサレムが据えられたその土地に、イエシュアによって帰らされるということが指し示されているのです。

そしてイエシュアを「神のメシア」と答えた「ペテロ」はヘブル語ではケファ(ケーファー)(כִּפְּאִי)とい  
います。ヨハネの福音書ではこれをはっきりと記しています。

#### ヨハネの福音書【新改訳 2017】

1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンを見つめて言われた。「あなたはヨハネの  
子シモンです。あなたはケファ（言い換えれば、ペテロ）と呼ばれます。」

彼のこの名はケーフ(קֶפֶס)「岩」という意味の言葉が由来ですが、この言葉は聖書で以下の二箇所のみで使  
われています。

#### ヨブ記【新改訳 2017】

30:4 彼らは陸ひじきや藪の葉を摘み、えにしだの根を食物とする。

30:5 世間からは追い出され、人々は盗人に叫ぶように、彼らに大声で叫ぶ。

30:6 谷の斜面や、土の穴、岩の穴に住み、

30:7 藪の中でいなき、いらくさの下に群がる。

30:8 彼らは愚か者の子たち、名もない者の子たち、国からむちでたたき出された者たちだ。

#### エレミヤ書【新改訳 2017】

4:27 まことに、【主】はこう言われる。「全地は荒れ果てる。ただし、わたしは滅ぼし尽くしはしない。

4:28 このため地は喪に服し、上の天は暗くなる。わたしが語り、企てたからだ。わたしは悔いず、やめ  
ることもしない。」

4:29 騎兵と射手の雄叫びに、町中の人々は逃げ去り、草むらに入り、岩によじ登った。すべての町が捨て  
られ、そこに住む人はいない。

4:30 踏みにじられた女よ、あなたはいったい何をしているのか。緋の衣をまとい、金の飾りで身を飾り  
たて、目を塗って大きく見せたりして。美しく見せても無駄だ。恋人たちはあなたを嫌い、あなたのいの  
ちを取ろうとしている。

4:31 まことに、私は、産みの苦しみにある女のような声、初子を産む女のようなうめき、娘シオンの声  
を聞いた。彼女はあえぎ、手を伸ばして言う。「ああ、私は殺す者たちの前で疲れ果てた。」

このように、ケーフは「世間からは追い出され」「国からむちでたたき出された者」そして「踏みにじられ  
た女」「産みの苦しみにある女」のような悲惨な状況にある者たちが住む、というよりは追いつめられる  
場所としての「岩」を意味しています。そしてその「岩」に追いつめられる者とは「娘シオン」すなわち  
エルサレムの、その神殿を家とするイスラエルの民です。終わりの日、彼らは黙示録の獣と呼ばれる反キ  
リストによってこのような状況に追い込まれることがここに預言され、ケファという名にはその事実が指  
し示されている、秘められているのです。つまりイスラエルの民がやがて「世間からは追い出され」「国  
からむちでたたき出された者」のようになる日が来ます。その様はかつての十字軍遠征、ホロコースト、  
ポグロムなどのユダヤ人迫害の比ではありません。大患難時代とよばれる、史上最大最悪の悲劇が彼らを

襲うのです。しかしその絶体絶命の中で彼らは変えられ、イエシュアを神のメシア、ハマシーアッハと呼び、それに応えるようにしてイエシュアが地上再臨され、彼らを救い出し、まさに預言者たちの祈りの成就としての「いのちを得なさい」という御言葉が成就するのです。これがヘブル語でなければ決して解き明かせない「ペテロが答えた。「神のキリストです。」」という御言葉に秘められた神のご計画の奥義です。まさにこう預言されているとおりです。

#### ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:8 その日、【主】はエルサレムの住民をかくまう。その日、彼らの中のよろめき倒れる者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになって、彼らの先頭に立つ【主】の使いのようになる。

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

イスラエルの民はこのように、かつて十字架によって「自分たちが突き刺した者」イエシュアを「仰ぎ見て」自分たちの犯した罪を「激しく泣く」嘆く日が来ます。そしてイエシュアはその苦難のどん底で弱り果てている「エルサレムの住民」を起こし、これを「ダビデの家は神のように」「【主】の使いのように」変えられ、回復されるのです。これこそまさに「神の国」成就、完成、まさに御国の福音の正体…It's Show Time!なのです。

### 3. 戒める

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

9:21 するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。

9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。

イエシュアは「弟子たちを戒め」られたとあります。ヘブル語でこれをツァーヴァー(תָּוַר)といい、その最初の言及は以下のものです。

#### 創世記【新改訳 2017】

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

このようにツァーヴァーとは本来「思いのまま食べ」よ、よく食べよ、大いに食べよ、ということ「命じられた」ことを意味しているのです。つまりイエシュアは神のご計画についてのこの重要な御言葉を、誰かに話し伝えることよりも、自分自身がまずしっかりと聞き、受け取ること、よく考え、思い巡らし、さらに聞き続け、受け取り続けることの方がはるかに重要であることをここで教え、戒めておられるのです。もしあなたがおいしいと噂のお寿司屋さんを見つけてこれを友人に紹介する時、そのガリしか食べ

たことがなかったらどうですか…。弟子たちはまず神のメシアとは誰か、一体どのような存在で、何を成し遂げられるのかということをよくよく理解する必要があったのです。私は今こうして皆さんに福音を語っていますが、当然のことながら語るよりも多くの時間を費やして御言葉を聞き、受け取り、よく噛んで味わって、飲み込んで、吐き出してまたよく噛んで、反芻して、ということを経てようやく語れているのです。ですから語ることも聞くことの方がはるかに重要なのです。

#### 4. 三日目

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。

イエシュアの受難、死とそして「三日目によみがえらなければならない」という事実。もう何度も何度も聞いたこの奇蹟を、今日も受け取り、味わいましょう。ヘブル的に理解するならば、これもまた「神の国」の「型」なのです。ここまで述べてきたように、やがてイスラエルは大患難という最悪の苦難、受難を通ります。彼らにとっての苦しみ、悲しみ、嘆きとは民族的な迫害、侵略により家族、民を失うことともう一つ、家を失う、奪われることにあります。その家とはエルサレムの神殿です。仮庵、幕屋とも呼ばれるそれは、昔から彼らの中心におられる神の、その選びの民であることの証でした。しかし今日、「第一」、「第二」の神殿は跡形もなく破壊され、わずかに城壁が残るのみで、それはまさにイスラエルの「嘆きの壁」と呼ばれています。やがて終わりの日には「第三」の神殿が建てられますが、これも反キリストによって奪われ、獣の神殿となり、破壊よりももっと悲惨な「日」を迎えます。イエシュアの死、その「三日目」に秘められた神のご計画がここにあるのです。つまりイエシュアはイスラエルの滅亡と再興、「神の国」へといたるイスラエルの歩みを、ご自分の受難と死と復活の中に表しておられるのです。ヘブル語で「復活する、よみがえる」ことをクーム(קוּם)といいます。これは本来「立ち向かう、襲いかかる」という意味の言葉なのです(創世記 4:8)。「三日目」すなわち「第三」の神殿が獣の手に落ちる「その日」、ついにイエシュアご自身がまさにクーム、立ち上がり、敵に対する反抗作戦が開始されます。それはまず教会の「携拳」という形で起こります。携拳とはただ教会が天に引き上げられるだけのものではありません。復活の身体をまとった天の軍勢が立ち上がる、起き上がることであり、すなわち携拳とはイエシュアの拳兵なのです。そしてこれらの天の軍勢を率いて王の王、主の主としてイエシュアは地上再臨されます。まさに敵にクーム、立ち向かい、これに襲いかかり、サタンと悪霊どもを縛り上げ、獣とその国を打ち滅ぼすためにイエシュアは立ち上がられるのです。イエシュアの復活の奇蹟「三日目によみがえらなければならない」は、まさにこの「型」なのです。そしてそれは滅びたイスラエル王国の復活、回復、再興という意味もあります。王もなく、家を、国土を奪われ、国家としてはまさに死んだイスラエルをよみがえらせること、エルサレムに神殿をよみがえらせること、そのご計画の「型」でもあるのです。もちろんイエシュアの十字架にはよく言われる罪の贖いとしての御業という意味もあります。しかしそれではこの「三日目」という意味は解き明かせません。イスラエルの回復、エルサレムの神殿なくして「神の国」は完成しません。だからサタンは執拗にこの国を、この民とその家を阻もう、奪おう、滅ぼそうとするので

す。しかし再臨のイエシュアがこれを退け、イスラエルの民とその家を回復されます。こう預言されているとおりです。

使徒の働き【新改訳 2017】

15:15 預言者たちのことばもこれと一致していて、次のように書かれています。

15:16 『その後、わたしは倒れているダビデの仮庵を再び建て直す。その廃墟を建て直し、それを堅く立てる。

15:17 それは、人々のうちの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、主を求めるようになるためだ。

15:18 ——昔から知らされていたこと、それを行う主のことば。』

「ダビデの仮庵」すなわちエルサレムの神殿が、イエシュアによって建て直されるその時「人々のうちの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての異邦人」すなわち、大患難を潜り抜け、イエシュアを受け入れたイスラエルの「残りの者」と、これにつながる「すべての異邦人」が主を求めるようになることが「神の国」の完成です。イエシュア受難と死、そして「三日目によみがえらなければならない」というこの事実はこの神のご計画を表した「型」であり、まさに「昔から知らされていたこと、それを行う主のことば」なのです。

## 5. 自分を捨てる

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

9:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。

9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるのでしょうか。

9:26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

「自分を捨てる」る、ここに使われているカーハシュ(צָרַף)は本来、以下のような意味で使われました。

創世記【新改訳 2017】

18:10 すると、そのうちの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」サラは、その人のうしろの、天幕の入り口で聞いていた。

18:11 アブラハムとサラは年を重ねて老人になっていて、サラには女の月のものがもう止まっていた。

18:12 サラは心の中で笑って、こう言った。「年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りで。」

18:13 【主】はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑って、『私は本当に子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言うのか。

18:14 【主】にとって不可能なことがあるだろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子が生まれている。」

18:15 サラは打ち消して言った。「私は笑っていません。」恐ろしかったのである。しかし、主は言われた。「いや、確かにあなたは笑った。」

サラは老人になった自分に子どもが生まれると聞き、それが信じられず一度は笑いましたが、主を恐れ、すぐにその考えをカーハシュ「打ち消し」ました。この瞬間、彼女はまさに「自分を捨て」たのです。主を恐れ、主を信じ、自分の思いや考えを捨てる、否定すること、それがカーハシュの本来の意味です。皆さんは自分の思いや考えを否定し、捨てるのが難しいと思ったことはありませんか。どちらかと言えば私たちはむしろ自分の意見や考えを持ったり、固持することの方が難しいのではないのでしょうか。すぐに人の意見や情報に左右され、またはその時の気分や心身の状態によってコロコロと変わってしまうことの方が実際には多いのではないのでしょうか。しかしユダヤ人の頑なさ、頑固さは筋金入りです。彼らの選民思想、律法主義による生き方は、たとえ国土を追い出され、異邦人の中に散らされても挫けることはありませんでした。そして彼らは今でも全てのユダヤ人が口伝律法を正しく守り行えば、特に安息日に関する掟を全てのユダヤ人が正しく守り行えば、メシアが来ると信じています。つまり彼らは今でも頑なに、自分の行いで自分を正しくしよう、自分で自分を救おうとしているのです。この誤った考えは、彼らが**大患難**という名の十字架を負い、そしてイエシュアが「自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき」に、自らこれを涙ながらに恥じて、まさにカーハシュ、捨てることになります。

## 6. 死を味わわない人たち

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:27 まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国を見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

今日ここに秘められていたイスラエルに対する神のご計画とは、一人ひとりのいのちに関する、個人的な復活、救いのご計画ではなく、イスラエルの民とその家である神殿、そしてこれにつながる異邦人という、民族的、国家的な救い、再建、回復の計画であり、まさにイエシュアは天で行われることを地でも行われるという壮大なビジョンであるということです。そのような視点で捉えるならば、上記の預言は、大患難を潜り抜けた、死ぬことなく生き残った、イスラエルの残りの者たちを指していると言えます。彼らに対する神のご計画が、今日の箇所には奥義として秘められていたのです。

今日の内容、解き明かしを聞いて、「やはりそうだったのか、ふふん、全部知ってたよ。」という人はおそらくいないでしょう。納得できない部分も多々あるかもしれません。しかしこの事だけは覚えていただきたいのです。私たち教会はこれまであまりにも聞くことよりも語ることに、よく知ることよりも、よく話し、よく伝えることばかりに注力してきました。実際今も自分でよく味わいもせず人にばら撒いてい

るのです。またあるいは、よく味わって、理解していないから、自分で美味しいと感じていないから人に勧めることをためらっているのです。おそらくこのような御言葉の解き明かしを聞くと、さらにうかつに聖書について語れなくなるかもしれません。それがイエシュアが言われた「誰にも話さないように」であり、正確には、よく聞きもせず、確かめもせず、理解もせずに、盲目的に軽々しく「誰にも話さないように」ということなのです。ただ、くれぐれも誤解しないでいただきたいのは、決して福音を語るな、などと言っているわけではありません。語る者はよく聞き、よく調べ、理解することを求めていただきたいということをお勧めしているのです。おそらくやがて死を味わうことになる私たちはその日まで、これからもますます奥義としての御言葉を深く味わってまいりましょう。